芸振

大分県芸術文化振興会議会報

No. 34　52. 3

発行所・大分市府内町　県教育庁文化課内　県芸術文化振興会議事務局
発行人・辻　英武　編集人・衛藤　久

芸術の温床は友情である

県芸振会議副会長
大分チャーチル会会長　河野　彰

最近、名古屋の友人からユトリロ展、ゴッホ展を観ての感激を「アルルとオールヴェルへは是非行きたい。ああプロバンスへ行って見たい」と感動をもって絵はがきに書いて寄越した。彼は今では私と同じく70才近い年令であるが、昔、学生時代私と文芸部で文芸雑誌を編集したりした仲の良い友人である。彼はアララギの岡麓門下で短歌をやっていたし、小説を書いたりしていた。今は私と方面違いの繊維関係の会社社長をしている。私もその当時小説を書いたり、少し油絵を描いたりしていた。当時私達とあまり年の違わないドイツ語の教師の、姉さん女房だった網野菊さんも私共の雑誌に時々ロシアの小説、詩の翻訳や短篇小説など寄稿して下さったりしたし、お宅を時々訪ねた。網野さんは人も知る志賀直哉の門下生で志賀さんには当時から特別の敬意をもっていたし、私達も暗夜行路やその他の彼の短篇等について熱っぽく話し合ったりしていた頃でもあった。その外詩人北川冬彦の友人だった、今、青森で医者をしながら独特の方言詩集を出版して活躍しているTなどもいて、面白い青春時代だったが、その思いは今も大切にしている。

浜の市・一文人形

田川　奨
県美術協会副会長

私が今関係しているアマの洋画団体は大した芸術活動というほどのこともないにしても、特別の気負もなく、昭和28年から今日まで続いているのも温かい友情の絆によるものと思っている。

創作活動は個人的なもの、しかも孤独な反社会的なものといわれている。しかしよく考えて見ると人間は本来、人との連けいによって生きているのであるから、社会と対比しての反社会であるわけである。従って社会と無関係な創作活動などあり得るわけはない。

竹田の生きた文化・文政期は文化の花開いた時期であるが、一見孤独であった竹田の周囲には西阜、百谷、元瑞、山陽、小竹、春琴ら文人墨客との交友が盛んであったことが竹田芸術を育てた一つの要素であったと思う。又芭蕉や一茶、山頭火らの孤独な芸術も実は温かい友情に支えられて形作られたものである。志賀・武者小路らの白樺、横光・川端らの新感覚派の運動にしても多くの詩人、画家、陶芸家の友情とはげまし合いによって豊かに実ったわけである。そこで私は考える。県内の各分野の芸術を愛する人達よ一、年令、職業、性別の如何を問わずに、視野の広い、楽しい緊密な交友は育たないものだろうかと。そしてそれは夫々の立場を尊重し、吸収し合う、いわゆる君子の交りでありたいものだ。友情こそは芸術を育てる培地である。

大分県の生活芸術・地域文化活動の夢

職場美術

20周年を迎えた労美展

此松法純
県労政課長・県労美展事務局長

県労美展も回を重ねて20回になり県内各界の愛好家の方々からは期待もされ、親しまれもしております。

そもそもこの労美展は創設の当初から誰でも参加し、初心者でも気軽に出品できる美術展、そして本当に生活を反映した勤労大衆の美術展をモットーにして来ました。

今年は20回記念展ということで、例年になく出品点数も多く、質の高い生活芸術を具現した展覧会になり、トキハの会場が狭くなるのではないかと心配した程でした。

この労美展は大分県が全国に先がけて、初めて勤労大衆の創作展として開催した試みであり、20年という永い伝統をもって続いているのは、多くの先輩や県内指導者の深い理解と援助もあって、他県に例をみない珍しい美術展として異彩を放っております。その後大分県以外の府県でも、この労美展に刺激されて、つぎつぎに創設したところもありますが、中々育ちにくく終に中断したり、続いても細々とした展覧会でしか残っておりません。

しかし私はこうした各県の労美展をさらに盛りたてて、夫々の県が開催したあと、推せんできる作品を一か所に集めて是非とも先ず九州労美展を開設したいと思って、九州各県に協力を相談してみたところ、各県ともその趣旨と企画に大変賛同して、まさに実現するかと思えるところまで漕ぎつけたのに、いざ実行の打合せ段階になって各県のいろんな事情から歩調がとれず、とうとう見送らざるを得ませんでした。本当に残念なことだと今でも思っております。

だが私は見果てぬ夢として、この労美展を県内だけでなく、本当の意味での生活芸術が、大きく飛躍してきっと九州労美展が実現する日が来ると思っておりますし、将来はこの九州労美展がきっかけで全国ブロックを誘発し全国総合労美展に発展し、勤労大衆が自由に自らの創作の覇を競うことが出来たらといつまでも夢を追いかけております。

華道

心を花のように

阿部華水
専正池坊大分支部長

生花は、言うまでもなく草木を素材とする日本独特の造形芸術です。私達の心を豊かにし、生活に潤をもたらすものとして、古くから愛好されてきたことも、皆様よく御存知の通りです。

また近年は、日本の誇るべき伝統文化の一翼として、広く海外まで知られ、花の心を通して世界平和に寄与していることも事実だと思います。

私は、若い頃古典生花の最も気品のある水仙の生花を見て、心から花を愛する様になりました。その時の魅力を、52年も経た今日でも、まだ忘れる事が出来ません。種々の芸事をしましたが、結局最後に華道一筋に生きようと決心して43年の月日がすぎました。今から思うと、生涯を貫く仕事として華道を選んだ事が、人生を力強く生抜く原動力となったのだと思います。

指導内容は、和合の精神を養い、情操教育の基礎として、心が花の様に美しくなる様にと、各教場でお話の場を作っています。そうすれば、自然と人格の向上にも役立つものと、若い社中、家庭婦人、学校教育、職場の人々にお話し、地方文化の向上と子弟の育成に努力しています。

最近の風潮として、努力を惜しむ現状ですが、凡て何の道にしても苦労の後には、必ず楽しみが訪ずれるものであると思っています。

日　舞

個性を大きく育てて

藤　間　茂登女
県日舞連理事・藤茂会主宰

日本舞踊の特徴とも言える伝承的芸術性は中央における文化活動としては甚だ夢多く、また研究話題としても、興味深い部分を持っていると考えられます。然し地方での地域文化活動の夢となると昔から一つも進歩していないと言われるかもしれませんが、よく言われている中央への進出や挑戦が夢になるでしょう。

それは過去において何度も繰り返されましたが結局はその夢のために地域には何も残っておりません。その事に私共は今、目を向けるべきだと考えております。だからと言って何もオペラの様に地方的新作をと願うわけではありません。それは楽しく嬉しいに違いありませんが、余りにも問題がありすぎます。それ以前にすべき事がある様な気がします。

例えば、日舞の会と言えば、別府、大分、日田、中津、佐伯と都市中心になっていますが、その中央的な何かが地域社会にどれ程、貢献して来たでしょう。小さくてもよい地域に散った師匠格の人が催す会があって、その地域社会の人々の目を、耳を、楽しませて古典への若い人の新しい感覚の芽ばえがあってくれればと思っています。又、三絃等についても若い人の現代感覚としての進出が始まってもよいのではないでしょうか。日本音楽に対する姿勢等は、一世代前の遊芸的なものから脱却しているでしょうか。

今、私達と言えば、言いすぎかもしれませんが、私の夢は遊芸的レジャーとしての日舞ではなく教養としての日舞が地域社会の中で大きくなり又、師匠たる人もそれにふさわしい勉強をしなければと思っております。その為には、中央に於いての良い感覚は多いに地方にどしどし持ち帰り又、地方の良いものは中央に紹介出来る様なムードを作り上げ中央と地方とをしっくりと結んで行きたい。例えば地方での物事を大切にする精神的なもの等は特に失いたくなく育て上げたいと思います。そして地方を中央と同じ物にするのでなく、どこまでも個性を大きく育て残して行く事が夢であります。

書　道

書を通しての人間形成

県美協名誉会員・豊池会代表
山　口　九　碩

先日私のところに電話がかかって来たが電話の声の様子からみて中年の女性のように感じられた。電話の内容は○○書道会ですか、貴会に入会しどの位で教えられるように（木会の師匠、師範のこと？）なるでしょうか。このようなことを電話で聞いて来るとは、一寸どうかしていると思ったが、それは貴女の努力次第です。そうですね五年乃至十年位はかかるでしょうと答えたところ、相当自信ありげな口調で二、三年程度でなれないかとの尋ねであったように感じられた。

終戦後書道（習字）が小・中学校の必須科目からはずされ、高学年の毛筆書も軽視されては、日本の伝統の書芸術の芽をつみとられた気がして甚だ残念であった。ところが数年前、小・中学校の必須科目に復活するように決定した。これに呼応して、急速に書道熱が高まって来ると、新聞の広告欄にも短期で書道の師匠に成れるような宣伝が出ている。問い合せもこんなところに、その気持ちがあるのではなかろうか。書を学ぶには執筆の法を得なければならない。

まず第一に潤筆（筆に墨汁を含ませる）を適度にして、線条に濃淡潤渇を考える。第二に運筆筆圧の強弱、抑揚、速度の遅速による線条の太細、暢達（チョウタツ）停踞（テイキョ）。第三に字型の大小の組み合せ。第四に変化ある配字の面白さの表現等々数えあげれば数限りが無いがこれ等を会得するには五年、十年は要する。そしてどうやらそれが出来るようになっても、真に風格のある格調の高い作品は容易に書けるものではない。

近時、青少年、婦人層の情操教育を叫ばるるとき、書を通じて人間形成に役立てんとする企画を、今こそ活用すべき時機ではあるまいか。社会はこれを要求してか巷（ちまた）にはここかしこに多くの書塾が簇出しているが、書を教える指導者は充分基礎的な筆法をしっかり身につけてお互いに恥ずかしからざる指導をしたいものである。

文化活動

芸術や文化を考えるのに、私が何時も心の隅に一つの抵抗として持つものは、中央文化、地方文化という見方、評価で一つの事象を表現することである。客観的にものをみる時歴史的には斯る論がまかり通った経過があったにしても、今日もそれが、まことしやかに持たれていいものであろうかと自問する。もっと意地悪く言えば、大分にも中央文化と地方（町村）文化が今日もあると言えるのであろうか、情報過多、情報平均、即時化の今日この思い上り論はあまり歓迎されないものとなっている。

大分県民が生んだ「吉四六昇天」の劇作事業は、所謂「中央文化」に対置する地方文化の異色の攻撃作でありもっとひがんで表現すれば、もうそれは、即ち「吉四六昇天」はプロの東京公演化となったので中央文化を克服した地方文化の勇者的存在であると称してよかろう。毛沢東流の芸術論からすると「吉四六昇天」は土臭い、汗臭い働く農民の生活の写実化であり将に農民文化であり生産文化であると高く評されるものであろう。ところで私の村にも農山村文化の象徴の一つとして校歌を除き、村内の文化団体により、公募、作詞作曲された歌が、この二十年間に三つ創作されている。

昭和三十四年大田村民文化会議が生まれ、学校に校歌があるように文化団体にも団体の歌があるべきだとの考え方で会議が村内に公募し「大田村民文化会議の歌」が誕生し茲来この団体が「大田村民の歌」「大田音頭」等を生み今日、村内の至るところで寄り合い、婦人会、老人団体、ＰＴＡ等の集いでこの歌が愛唱されている。

一時は、この団体が音楽部もつくり、村内のいろんな団体の総会に要請され巡回演奏をしたこともあった。今もこの団体の活動は農山村文化（敢えて表現したい）振興の力になっている。私は土臭い、汗臭い裸足の文化こそが、日本文化を支える基礎であるを疑わない一人である。

[redacted]

農山村の文化活動の流れ

大田村教育長　清　成　克　行

歳月の中に文化活動の実りが

岡　部　忠　之
宇佐市文化協会長・宇佐市社会教育委員

昨年宇佐市は全国唯一の文化財保護宣言都市として発足しました。文化財の保存維持を第一とする宣言です。風土記の丘は数年前、国・県・市によって計画されました。今は用地を買収した段階です。やがて其処に考古資料館も建ち、出土した埋蔵文化財が展示される事になります。古墳文化をお見せする場となります。神宮より、約２キロメートル位のところです。

文化国家や文化都市とは、文化創造維持発展を最高の目的とせねばなりません。文化の創造発展の面を推進するのが、文化協会会員の努力にかかわります。ここ５年間に協会の主催や共催後援の催物は、県民オペラでは、椿姫、蝶々夫人、吉四六昇天、バレーはゆりかご会、わらび座、新制作座等の公演を致しました。これは地域住民に色々と理解と協調をお願いする機会になります。

ところで、上演にあたって最大の悩みは、会場が狭いという事です。次にギャラの金集め、即ち前売券をさばくことの困難性の問題です。上演会場としての文化会館建設の夢を常に抱いています。市当局に署名、陳情、請願を数回行って、早急な建設を期待していますが、オイルショックによる、地方財政の悪化にともない、その実現は先へ先へのびて行きます。県美展巡回は戦後すぐから20数回開催、美術面では市美協の会員40余名で、中には東光会展や大潮展の審査員がおります。今一番気にかかっておるのはコーラスグループのない事です。結論として指導者のいない事です。

宇佐神能の伝統による、謡曲、能の部面では県下一の会員数の充実を誇っています。師範の方々も県下一でしょう。其他各参加グループ60余は日夜たゆまぬ努力を続けています。今我々は文化の香り高い町づくりに一段の力を入れています。而し文化運動は長い長い年月間に育成されるものです。地域社会に芸術を通して奉仕する姿、これが人間にとって一番大切なことではあるまいか。この夢を持ち続け精進努力を致したいと思います。

[redacted]

民　　謡

ふるさとの振興を軸に

園　田　喜　平
県芸振会議理事
県民踊連盟副会長

芸術文化の向上と、マスコミとの係わり合いは密接な相互関連性が大きい。マスコミの発達は芸術文化の進歩に大きな貢献をしている。

県民は未だ且つてなかった程の芸術文化への関心と、豊かな情操を養っている。喜怒哀楽の情を昇華して、その素直な表現を芸術化して行くことが今にも出来そうな高まりを感ずる。

伝統も慣習もない団地に住民の声により、「団地まつり」がいつの間にか生れている。そしてその行事の中に芸術性がにじみ出ている。にわか作りの団地の詩や、既製の郷土民謡等の舞踊や日舞、神楽等々で行われ現住の土地を住みよいふるさとにしようとする情感を育てている。

現在、県民の間に異常な発達と滲透を見せているものに民謡、民舞があり詩吟、日舞等々がある。

県が主唱した「ふるさとの振興運動」が拍車をかけたことは間違いないが、それ以前すでに県下各地に、その芽生えは充分あった。

新しい物への憧れから、古きよき日本の持つ芸術を見出して行こうとする風潮が生れ、末端伝達の指導者も続々生れた。その気運と場所を提供したものに部落や地区の公民館がある。現在では県下殆どの部落に公民館が設置され中心機能となって、この風潮を更に盛りあげている。

部落や町内にある公民館は中央公民館、文化会館、芸術会館等の機能に近づけ、地域での教育伝達や、発表会や、コンクール等の行事を幅広くおこない、部落文化会館の様相を呈するようにしたらどうであろう。

又中央や、ブロックで行われる展覧会や発表会、コンクール等も個人出場と言うより、部落、町内、校区という団体での出品出場として、県民末端まで芸術文化への関心を高めるということにしたらどうであろうか。

青年演劇

無気味な厚い壁

渡　辺　泰　三
犬飼町民文化会議事務局長

昭和34年5月、「欅の木の下で」で産声をあげた青年演劇サークルあすなろ。登場人物の村長さんがアプレゲール（戦後派）をアキレケールと称した当時は、健康な笑いがあった。

しかしながら、10年の展望が、反省の余裕もなく2、3年で達成される科学文明のテンポの速さをみていると、歯車が狂っているとしか思えない。家庭で一学校で一社会で一。文明を文化と考える思想が蔓延してはたいへんな社会となってしまうと思う。文化生活、文化住宅、果ては文化風呂に至るまで。至近な例だが、町の祭バヤシの一つがまた消えた。 これをなんとも感じない地域社会の感覚、 気づかぬ間にすっかり変えられているのであろうか。「人間と自然との調和」 から生まれた郷土の文化遺産、 伝統行事、民間説話までが消されてゆく。生活環境の激変で、コミュニケーションの希薄さ、冷たさが、農村でもあたりまえとなってきている。したがって、全町民的行事がむずかしくなり、とまどいばかりが目につくのが今日的課題となった。

演劇は総合芸術のアンサンブルである。社会教育の絶好なパターンとして、若い世代にとって必要である。より高度な密度の濃い人間関係がなければ演劇は出来ない。10数年を経過した今日、あすなろは4年前から県民演劇に参加してきた。舞台は観客あってその意義がある。最今、商業演劇でも観客が集まらないという第三の厚い壁が私たちの前に出現してきたのである。月並な表現だが、豊富な社会の「教育公害」の現われだろうか。巨大なメカニズム、ぼう大なマスコミの圧迫で、私たちは管理社会に追い込まれているからであろうか。

私は、学校などで安易に学芸会、文化祭、学園祭をやめぬよう願いたい。豊かな人間性、情緒あふれる市民連帯意識の回復、健康な笑いをとりもどすことが、第三の厚い壁を打破することにつながると信じている。何をやっても白々しい社会はゴメンこうむりたい。今後の文化活動は戦いのドラマとなるであろう。

青年演劇は、趣味娯楽の類いとは考えたくない。

音　楽

大きく育ちたい音楽活動

中　野　幸　和
県職場音楽連盟理事長

職場の中には「コーラス」「ギター・マンドリンサークル」「バンド」それに邦楽の「尺八グループ」など様々な音楽チームが、それぞれの水準を持って存在している。そして、仕事の余暇に集まり、指導者を求め、また相互研究などで音楽の演奏活動をしている。

それは、みんな趣味として音楽を愛し、楽しみ、そしてささやかな心の豊かさを求めているのである。勿論、明確に「芸術、文化」なる言葉は意識していない。しかし、職場の中では、文化団体として間違いなく位置づけられているし、評価に値する活動も続けていると確信している。

具体的な私の活動はといえば、大分国体の翌年、42年6月に、それぞれの職場の音楽チーム16の団体が集まり「職場音楽連盟」を組織した。そして「音楽会の開催」「音楽研究会の実施」「社会福祉施設の慰問」の三つの活動目標を掲げた。

それは、音楽活動に一つの大きな舞台演奏の目標を持たせ、そのため、その音楽を順次高める合同研究活動を実施すると共に、音楽活動を通じて、社会人としてのボランティア活動を行うためであった。そして十年間。一応着実な実績を挙げた。

将来は、単に器楽の演奏活動に止めず、曲の演奏をはじめ、あらゆる分野の音楽を鑑賞、そして自分の気持ちを表現するための作曲、さらには、自分達のチームのための、編曲、いわゆるアレンジ活動までのびて、「音楽における幅広い存在」になるよう、お互いの職場音楽関係者が育って欲しいものだと、夢を描いているのである。

（[redacted]

合唱の輪を広げよう

鈴　木　美智代
明野ル・コール・デ・メール指揮者

明野ル・コール・デ・メール（ママさんコーラス）は合唱の好きなお母さん達と言うより、友人の集まりです。

明野の山に歌声が流れて、今年の春で、6年目。僅か5年の間に、全国各地のママさんコーラスグループとも交流をはかる機会に恵まれ、良い刺激を受けて、50名の団員と共に、より素晴らしいハーモニーを、と意欲を燃やしております。私達グループの夢は、今まで勉強して来た合唱曲を演奏会の形で発表する事と、合唱連盟に、ママさんの部を作ってもらう事です。もう一つの私の夢は、大分県の各地に育っているママさんコーラスの輪を広げ、少人数で固まる事なく、交流を盛んにして、合同演奏会を開きたい事です。昨年は、芸術祭開幕行事「合唱音楽の夕べ」で4団体のママさん100名余りと合唱する機会を作って戴き、相互に友好を深める事が出来ました。今年は「第九」の演奏を通して、又新しい友を得られる事でしょう。願わくば、第九に集まった仲間の中から、新たに混声合唱団が誕生しその輪が、高校、職場、一般（特にママさんコーラス）と広がって、一団体でも多く西部合唱連盟に加入してもらいたいものです。

合唱は相互の信頼感の上に培われる音楽です。この合唱と言う共通の喜びを持つ同志が、大分県の隅々に広がり、各地で、ハーモニーが響きわたる事を願っています。

[redacted]

街のすみずみまで音楽を

丸　岡　　久
大分音楽友の会運営委員長

私は、橋幸夫が大好きであった（今もそうであるが……）。多くの人がそうであるように、クラシックというのは眠いもの、という意識を、学校で無理矢理レコードを聞かされるうちに持つようになっている。だからある機会にめぐり会うまでは、私もその一人であった。ある機会というのは、現在の「大分音楽友の会」（旧大分労音）でベートーヴェンの第九交響曲の演奏会があってからである。合唱団は地元で編成するというので、誘われるまま私も一員として加わった。

そこで、テープに第九の全曲を入れ、まいにち寝る前に30分位ずつ聞いて寝た。半年間続けるうち、面白いもので歌もそれらしくなり、「メロディー」も覚えたではないか。いよいよ当日のステージ。舞台に立った時のあの胸をつき上げる熱いものは、今も忘れる事はできない。あれをきっかけに、クラシックだけでなく、いろんなジャンルの音楽に興味をもち始めた。フォークも、カンツォーネも、民謡も……。大分市には、30万人以上の人が住んでいる。その内多くの人は、音楽が生活の一部になっている状態ではない。しかし、〃ある機会〃さえあれば、必ず変っていくと思う。

近く再度「第九」の演奏会が開かれると聞く。大変嬉しい事である。そこで、又何人かの人が変るだろう。一人一人と変わり、大分の街のすみずみから、音楽の感動があふれ出る事を望みつつ、音楽鑑賞運動に精出しているものである。

（[redacted]

県社会教育委員（S 51. 12. 22 / S 53. 12. 21）

氏名	役職名	氏名	役職名
甲斐郁美	県小学校長会会長(荷揚町小学校長)	大谷　弸	日田市社会教育委員
高橋寿満	県高等学校長代表（杵築高校長）	小田桂三	大分合同新聞論説委員
藤井孝則	県中学校長代表（鶴崎中学校長）	久高喜行	県立芸術短期大学助教授
麻植敏秀	県高等学校ＰＴＡ連合会会長（県議会議員）	後藤文夫	大分大学教育学部長
荒巻聡子	県子ども会育成会連絡協議会会長	佐久間盛夫	竹田市長
椎原ムツヨ	県地域婦人団体連合会長	佐藤文生	県図書館協議会委員（衆議院議員）
菅田敏幸	県連合青年団団長	高屋光三郎	大分県町村会会長（野津原町長）
正本秀雄	県公民館連合会々長（武蔵町長）	中山宏男	市町村教育委員会連合会会長
吉村格哉	県ＰＴＡ連合会会長	長野シズ	県ユネスコ協会連盟常任理事
安部亀雄	佐伯市教育長	野尻　哲	「小さな親切運動」大分県本部長（県議会議員）

茶　道

一わんの精神から

江藤憲人
裏千家淡交会県事務局長

御茶の道は道・学・實など厳しい研修を積み得た心を通じて世の中が明るく暮せる様たえず己の心をかえりみて、一わんを手にしては多くの恩愛に感謝をささげ、お互いに人々によって生かされていることを知る慶びを御茶によって皆様に伝えるよう努力しています。

これには御家元から年間４回に亘り業躰の先生を派遣され、会員の研究会が行われ、茶道人としての人造りに亦支部としても茶道の真意を社会の為役立つ様指導者の研修或は野外の茶会または社会福祉の一端として老人ホームの訪問茶会等何かと計画を進め、社会的何かと貢献をしたいと存じます。

御家元は国民皆茶を提唱して御茶の心を混乱した現在社会の中にとり入れて日本人の心をとりもどす様グリンピースフルネス運動を展開しています。

県民の皆様どうか茶の道の意のあるところを御納得いただき多くの方々の御参加を希望いたしますと共に、茶会の節は御遠慮なくお越し下さいまして、一わんのお茶を御賞味下さいまして、御理解賜わります様希望いたします。

（[redacted]

かわの眼科
河野　彰
大分市府内町２丁目５－９（トキハ北口通り）
ＴＥＬ　大分（0975）32－2480
時間外　36－7547

波紋

「文化活動、それは人のこころを豊かにする営みである」といわれるが、大別して二つの面があろう。用意（提供）されたものに参加することで満たされる場合もあろうし、自らの意志で積極的に活動する場合もあろう。地域で文化活動を考えるとき、前者は、行政施策、民間企画等であり、後者は、住民自身あるいはグループ活動である。地域文化の振興には、その地方固有の郷土色豊かな文化の振興と地方文化水準の向上の両面より文化振興をすすめなければならない。

最近、県下各地に近代的設備をもつ公民館が次々に建設されている。このいずれの公民館も、地域の特性に応じ、それぞれ学習活動を計画し、地域の住民と一体となり、地域住民の知性の向上、人間性の確立、住民の日常的な生活をささえる文化（精神的・内面的充実を促すもの）活動に努力している。つまり、一般住民に開放された一つの場が公民館である。例えば、いま、公民館では絵画・コーラス・短歌・芸能・文化財などのコースを設けて、地域住民を対象に学習の機会をつくっている。勿論、集まる人たちは趣味の域を脱しない、いわゆる文化・芸術とはおよそ縁遠いものであるが、一つの動機づけとなって、自主活動が展開され、大きな仲間の輪となって広がっている。また、すぐれた芸術（指導）にふれる機会を得、自らの活動の発表・相互啓発の場と機会を得て自主的な文化活動が展開されている。

それだけに公民館を基地として、新しい時代に即した住民のための多彩な学習の場をつくる。研究修養はもちろん、文化芸能も社会教育のそれぞれが連絡しあえる場づくり。地域文化の振興を図るため、講演会・展示会・作品展・研究会・発表会等、全地域にわたり数多く開催することなど、全公民館が一丸となって活動することが、地域文化の振興を図ることになると考えるのである。

地域文化の振興と公民館

大分市鶴崎公民館・社会教育主事
太田　政司

ニュース

◎1月16日（日）

今年の第13回県芸術祭の行事、オペラ「カルメン」の初練習が18時から春日町小学校で行われた。

今年の第13回県芸術祭の行事に、大分県民演劇制作協議会が上演するが、この劇に中津出身の前野良沢（1723—1803）をとりあげることになった。主題は未定であるが、脚本は現在同協議会の中沢堅氏が執筆中。5月からスタッフの稽古に入る予定。

◎1月29日（土）

第1回大分ジュニアオーケストラ・ジュニアコーラス新春演奏会が15時30分から大分文化会館で開催された。ヘンデル「水上の音楽」草川信「汽車ポッポ」その他が演奏された。昨年8月ジュニアオーケストラとジュニアコーラスが関係者の協力で結成され、今回は第1回の演奏会、さわやかな演奏会であった。

◎1月29日（土）～31日（月）

第3回県高年文化祭、創作美術展が大分市府内会館で開催された。主催県社会福祉協議会。老後の生きがいを創作にもとめる人たちの作品展らしくバラエティに富むものであった。

◎2月1日（火）～6日（日）

第16回県展選抜展が東京都美術館で開催された。主催文化庁。

大分県からは露木恵子（日本画）、江原勲（洋画）、北野隆士（彫刻）、若林董子（工芸）、井手貞彰（書）宮地泰彦（写真）の6氏の作品が選抜出展された。

◎2月18日（金）

第2回大分市民音楽祭が13時から大分文化会館で開かれた。主催大分市教育委員会。

職場、PTA等によるコーラス・バイオリン・ギター等すばらしい合唱や演奏がくり広げられ、明るい雰囲気であった。11団体350人が出演。

◎2月20日（日）

萬謡会名取会が10時から県農業会館で6時間にわたって開催された。祝いめでた、関の鯛つり唄などがはなやかにうたわれ盛況であった。

◎2月26日（土）

杵築市連合青年団の主催により、大分県民演劇制作協議会の演劇の公演が行われた。

演目は、昼の部「山弥長者物語」夜の部「山弥長者物語」と「貧乏神」の2本。1,600人の観客は県民演劇のたのしさを味わっていた。

◎2月27日（日）

大分市社会教育研究大会が鶴崎公民館で開催された。主催大分市教育委員会。約800人が参加、充実した一日であった。

この大会には分科会がもたれたが、その中の第3分科会では「地域における芸能文化活動のあり方」が研究討議された。

カットのことば

田川　奨

もう20年程にもなろうか、大分の浜の市で求めた一文人形があまりに見事だったので、その次の年、買いたすつもりでかけたが、一文人形を作っていた爺さんが死んで、もうできないと言う。それ以来、手許に残った八つの首人形がいよいよ貴重なものになった。